

Title	コロナ危機における中国語オンライン授業の挑戦： Moodleと身近なSNSを活用して実現した双方向性ある授業
Sub Title	Challenges in conducting an online Chinese language course during COVID : using Moodle and familiar social network sites to create interactive classes
Author	石野, 一晴(Ishino, Kazuharu)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.17, (2020.) ,p.155- 174
JaLC DOI	
Abstract	This paper describes an online course for elementary and intermediate Chinese learners that I conducted as a part-time instructor in 2020. Because of the special circumstances of the coronavirus disease pandemic, I developed a low-cost interactive course through bricolage of learning management systems and social network sites familiar to students. Specifically, the majority of the teaching materials were presented on the Moodle platform, and anonymous questions were accepted from students via Google Form, which were then answered for all students using the Open Chat function of LINE. In addition, for some classes, Zoom was effectively used to conduct one-on-one oral exams with students, and the breakout room function was used to allow students who tended to be isolated to interact with each other. In order to keep this system running for a year, I had to work from early morning to late at night every day, which may not be a sustainable method. However, a part-time lecturer like myself, who could not invest money in equipment or get help from teaching assistants, was able to make the best use of limited resources to continue the students' learning and greatly contribute to the improvement of their Chinese language skills during the pandemic.
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20200000-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コロナ危機における 中国語オンライン授業の挑戦

—— Moodle と身近な SNS を活用して実現した双方向性ある授業

石 野 一 晴

Abstract

This paper describes an online course for elementary and intermediate Chinese learners that I conducted as a part-time instructor in 2020. Because of the special circumstances of the coronavirus disease pandemic, I developed a low-cost interactive course through bricolage of learning management systems and social network sites familiar to students. Specifically, the majority of the teaching materials were presented on the Moodle platform, and anonymous questions were accepted from students via Google Form, which were then answered for all students using the Open Chat function of LINE. In addition, for some classes, Zoom was effectively used to conduct one-on-one oral exams with students, and the breakout room function was used to allow students who tended to be isolated to interact with each other. In order to keep this system running for a year, I had to work from early morning to late at night every day, which may not be a sustainable method. However, a part-time lecturer like myself, who could not invest money in equipment or get help from teaching assistants, was able to make the best use of limited resources to continue the students' learning and greatly contribute to the improvement of their Chinese language skills during the pandemic.

はじめに

本稿は筆者の2020年度における中国語科目のオンライン授業実践記録である¹。2020年はコロナ禍により各大学は遠隔授業を強いられた。筆者は2020年度、慶應義塾大学を含む4校で合計12コマの中国語授業を担当した。コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、大学はオンライン授業への転換を迫られたため、多くの大学は5月に開講がずれ込むことになったが、その間、筆者のような専業非常勤講師は、授業の全体像を構築する必要があった。SNS等で流れてくる

各教員の個人的な取り組みは興味深く、自らの授業を構想する上でも非常に役に立った。しかしながら、高価な機材の購入や、一定程度のスペックの PC を有していることを前提とした試みも多く、経済的資源に乏しい非常勤講師にとっては、それを試すことは困難であった。その上、それらの教員よりも画質・音質に劣る授業をすることで、学生に比較されてしまうのではないかという不安もあった。筆者は、あり合わせのもので間に合わせて授業を構築して行かざるを得ない。不安定な回線と、スペックの低いノートパソコンでも駆動できるシステムを求めて、知恵を振り絞るしかなかった。

さらに問題となるのは受講生の環境である。端末を所有しているのか、ネット環境はあるのか、LMS を使いこなすことができるのか、不安は尽きない。学生の IT リテラシーには個人差が大きいから、開講当初にはそれなりのサポートなしには授業が円滑に運営できないのではないかと危惧された。そして、最大の難関は双方向性の確保であった。課題へのフィードバックをどうするか、学生からの質問をどう集めるのか、今年度の授業の成否はおそらくこの部分で決まるのではないかと思われた。

上記のような問題を解決するために、以下のような3つの方針を立てることにした。

- ① 授業の中核には Moodle によるオンデマンド教材を据え、アウトプット中心の授業を展開し、課題には可能な限り速やかにフィードバックをする。
- ② 学生との双方向性を高めるため、学生が使いやすい質問の方法を自分で選べるようにする。
- ③ Zoom が利用できる大学では、教員と学生、学生同士の交流を活性化させる。

これらのことを、自らの所有するデバイスと、あり合わせの知識を組み合わせでどのように実現したのかを、順次説明していくことにしたい。第1章では、授業の中核となる Moodle の活用法について述べる。第2章では LINE と Google フォームを用いて質問を集め、それを全体で共有する仕組みについて説明する。第3章では、学生たちをオンラインで交流させるために行った筆者のささやかな取り組みについて説明する。

なお、上記のような目標を達成するための第一段階として、5月に開講する際に筆者が注意したのは、「まず顔がみえる授業をする」ということであった。Zoom を利用して初回ガイダンスができる授業では、学生の前で自己紹介などのコミュニケーションができるが、完全オンデマンドの授業では、学生とは文字上のコミュニケーションが中心となる。しかし、顔も知らない教員に大量の課題を課せられては、学生のモチベーションが上がらないのではないか。そう考えた筆者は、YouTube にメッセージ動画をアップロードしたり、LMS やメールのアイコンは全て顔写真にしたりして、少なくとも文字の向こうには生身の人間がいることを実感してもらうように努力した。

第1章 授業の核となる Moodle の活用について

まず授業の中核として定めたのは LMS の Moodle であった。実は、筆者はオンライン授業とは関係なく、対面授業でも Moodle を積極的に利用することを決めて準備を始めていたところであった。筆者はかつて Moodle を用いた初年次教育授業を担当した経験があり、様々な機能を調べていくうちに、この LMS は語学教育と相性が良さそうだと感じていた。それゆえ、2019年度に慶應義塾大学外国語研究教育センターでも Moodle が運用されていることを知ると、試験的に運用を始めていたのであった。ただ、問題集などの教材を作成するための時間的余裕が不足していたこと、そして対面授業の中での LMS の位置づけが定まりきらなかったこと、また教科書の音声などをアップロードするには著作権の問題が懸念されたことなどから、あくまでも参考資料として簡単な小テストや動画のリンクを提示するのみに留まっていた。2020年度は、前年度の反省に鑑み春休み中から徐々に小テストを作成しはじめていたので、Moodle を全面的に利用することへの心理的な負担は全くなかった。

Moodle が比較的広範に普及していたことは不幸中の幸いであった。出講先でメインとなる LMS として設定されていたのは、早稲田大学に限られたが、慶應義塾大学、学習院大学でも部局レベルで Moodle が提供されていた。それぞれ利用しているバージョンは微妙に異なり、大学によっては独自のカスタマイズが行われているが、基本的な機能に大差は無い。問題を作成するツールを利用して、データベースを作成することも容易である。教科書が共通していれば、問題を複数校で共有することも可能であった。非常勤講師が複数のシステムに対応することを求められた中で、自らの望む LMS の使用が認められたことは、負担を大幅に軽減し、リソースを学生対応に注ぐことを可能にした。

問題は、Moodle をどう運用するかである²。筆者は4月中に以下のような方針を定めた。「授業の中核には Moodle のオンデマンド教材を据え、小テスト機能を用いてアウトプットを中心としたコンテンツを設計する。授業は動画ではなく音声と資料を配信し、関連する小テストを課すことで確実に理解させる。教科書付属の練習問題等は手書きで解答させ、写真撮影して提出させる。Zoom 等が十分に使えるかはわからないので、発音指導は音声ファイルを提出させて、それにフィードバックをする形で実施する。」この方針を基本として、授業に間に合うようにコンテンツを作り続けた。

コンテンツの冒頭には単語テストを置いた。これは授業前に最低限の予習を習慣化してもらうためである。内容はリスニング問題、単語からピンインへの変換、ピンインで書かれた文章を中国語に直すなど、教科書に出てくる単語を確実に記憶することを課した。これらは別解が滅多に生じないので自動採点が容易であった。問題を速やかに大量に作成するためには様々なツールが開発されているが、筆者が最も活用したのは北海道科学大学の深井裕二氏が提供している QuEdit (<https://www1.hus.ac.jp/~fukai/>) であった。オフラインで作業できるので、シ

ンプルな記述問題であれば Moodle 上で作成するよりも圧倒的に素早く作成できる。例えば、教科書の単語の音声を聞かせ、正しい簡体字を入力させるリスニング問題は毎回10問以上作成した。また、ピンインの知識を確実なものとするため、単語のピンインを入力させる問題も多用した³。加えて、後述するように並べ替え問題は1年生の秋学期の授業や2年生以上の中級の授業に大きな威力を発揮した⁴。

Moodle は小テストの得点に応じて再受験の回数を設定できるので、合格点に到達しなかった学生に再受験をさせることができる。筆者は再受験を無制限にして満点を合格条件とした。これをシステム化するために活用したのが「利用制限」機能であった。全ての小テストに、満点を取得したら活動完了になるよう設定を施し、右側のチェックボックスに印が入るように設定した。その上で、一つ前のコンテンツが活動完了にならないと、次のコンテンツにアクセスできないように制限をかけたのである。こうすると、受講生は全ての単語を暗記し、文法事項も理解しないことには受講を完了することができなくなる。なお、初回は適当に解答して正答を確認し、2回目以降で満点を取るような行為が横行しないように、期末成績は初回受験成績を積算することにした。なお各コンテンツの受講期限は、3日以内、もしくは1週間以内として、通信環境に恵まれない学生に配慮した。期限に遅れた学生はその段階で履修継続不可という設定にしたものの、諸般の事情で締切に間に合わなかった学生には適宜救済した。

この方式では、満点を必須にしたとしても、いくらでも資料を参照できるので教育効果が上がらない懸念もあったが、筆者は学生を信頼することにした。また、この課題は仮に資料を参照したとしても意味があるように設定している。中国語の授業、とくに初年次の授業において教科書付属の練習問題は、教科書を参考にしながら解くことは珍しくない。何らかの資料を参考にしたとしても、正答をIMEで打ち込むことで身につくことは確実にあるはずである。

例えば、筆者はリスニング問題、とくに教科書の単語もしくはフレーズのディクテーションを多数出題した。名目上は音を聞いて何も見ずに正答を入力してもらうのだが、仮に教科書を参照しても、当該学生は少なくとも中国語の音声を聞いて、正しい単語やフレーズを教科書から探し出すという活動をしなければならない。

筆者は例年、対面授業で学生に教科書付属のCDないしはMP3を自宅で、あるいは通学時に何度も聞くことを推奨しており、実際に大半の学生がそれを実行してくれるのだが、何人かの学生はCDからPC、スマートフォンに音源を取り込んだり、MP3をダウンロードしたりすること自体を手間を感じるようで、全く実行してくれない。授業時のトレーニングだけでは、絶対的な練習量が足りないの、リスニングに全くついて行けず、そのまま脱落していく学生は毎年何人かいるものであった。Moodleで満点必須のリスニング問題を解くことは、少なくとも1回は教科書の音声を聞くことが担保される。リスニングが苦手な学生は1回聞いただけでは正答にたどり着けないであろう。かくして当該学生は否が応でも中国語の音声と複数回付

き合わざるを得ない。Moodle の小テストによってこのような最低限の学習をシステムとして埋め込むようにしたのである。

文法事項などの解説は音声と資料を別々に配信することにした。PowerPoint に音声を埋め込んで動画にする方法や、各大学の配付するツールや Zoom などを用いて動画を作成する方法なども検討したが、動画自体の容量が大きく、学生の通信環境に配慮する必要があったこと、さらに筆者自身の端末が非常に貧弱で動画編集ソフトが上手く作動しなかったことなどもあり、音声配信のみとした。スライドは全て頁数を振り、「〇ページをご覧ください」といった言葉を適宜いれつつ、ページめくりは学生個々に任せた。スライドはできる限りカラフルにして、時折「遊ぶ」ようにした。単語解説のスライドではその単語に関係しそうな「いらすとや⁵」の画像を散りばめ、例文も学生の印象に残りそうな内容を含めることにした。

音声は Moodle に埋め込むパターンと Google Drive や BOX といったオンラインストレージへのリンクを張るパターンの両方を準備した。前者はワンクリックで音声が聞けるという利点があるが、Moodle のページ読み込みが遅くなるという難点があった。後者はクリック数が増えるが、倍速などに対応していたので、これを好む学生もいた。時間は10分をひとつの単位として考え、基本は2本、最大でも3本30分以内に止めるようにした。語学の授業はアウトプットこそ重要である。あくまでも「精講多練」をモットーに、説明は簡潔に留めた。

文法理解を定着させるために利用したのが並べ替え作文である。この作り方を覚えることができたことは1年間の授業を非常に楽にした⁶。Moodle には manaba などとは異なり並べ替え問題が標準でサポートされていない。それゆえ「ドラッグ&ドロップテキスト」問題を応用する必要がある。例えば5つの単語を並べ替えるのであれば、以下のように問題テキストに [[1]] [[2]] [[3]] [[4]] [[5]] という選択肢を打ち込み、選択肢に中国語の文章を単語ごとに分けて入力しておく。そして「シャッフル」設定をオンにすれば、適宜単語が並べ替えられて出題される (図1参照)。

これはスマートフォンでも使いやすく、対面授業でも通学時間中などの細切れの時間を使って授業の復習をすることもできるだろう。そもそも Moodle の活用を考え始めたきっかけは、忙しい学生が通学途中に簡単に問題演習ができる仕組みを実現したいと思っていたからである⁷。筆者は、教科書の練習問題や例文を活用して、大量の問題をストックすることができた⁸。

ドラッグ&ドロップテキストの編集

▼ 一般

現在のカテゴリ 現在のカテゴリ 方向補語の派生義 (24) このカテゴリを使用する

カテゴリに保存する 方向補語の派生義 (24)

問題名

問題テキスト

あなたは話し続けてください。

▼ 選択肢

シャッフル

選択肢 [(1)]	答え <input type="text" value="你"/>	グループ <input type="text" value="A"/>	<input type="checkbox"/> 無制限
選択肢 [(2)]	答え <input type="text" value="说"/>	グループ <input type="text" value="A"/>	<input type="checkbox"/> 無制限
選択肢 [(3)]	答え <input type="text" value="下"/>	グループ <input type="text" value="A"/>	<input type="checkbox"/> 無制限
選択肢 [(4)]	答え <input type="text" value="去"/>	グループ <input type="text" value="A"/>	<input type="checkbox"/> 無制限
選択肢 [(5)]	答え <input type="text" value="吧"/>	グループ <input type="text" value="A"/>	<input type="checkbox"/> 無制限
選択肢 [(6)]	答え <input type="text"/>	グループ <input type="text" value="A"/>	<input type="checkbox"/> 無制限
選択肢 [(7)]	答え <input type="text"/>	グループ <input type="text" value="A"/>	<input type="checkbox"/> 無制限
選択肢 [(8)]	答え <input type="text"/>	グループ <input type="text" value="A"/>	<input type="checkbox"/> 無制限

問題 1

未解答

最大評点 1.00

。

あなたは話し続けてください。

図1 ドラッグ&ドロップテキストを応用した並べ替え問題

なお、これらの小テストを作成する際には、復習テストとして再利用したり、学生ごとに異なる実力テストを作成したりするためのデータベースとして活用できるように意識した。単元ごとや文法項目ごとのフォルダを作成してそこに問題を蓄積していくようにすれば、小テストのランダム出題機能を利用することで、任意の問題数をランダムに出題する実力テストが作成できる。また、文法問題に関してはレベルごとに分類して水準を平準化してフォルダ分けした。

これを応用すれば、忘却曲線の理論に基づいて、忘れそうになる頃に再度出題して、理解を確実なものにするような授業設計も可能であろう。

この1年間で、気付けば合計数千の問題を作成していたが、このような作業は一人で行うには限界がある。将来的にはデータベース作成は多くの研究者やTAなどの協力を得て実施しないと難しい。著作権の問題などがクリアされれば、教科書ごとに Moodle の小テストを作成してデータベース化することや、あるいは Moodle を用いることを前提とした教科書が出版されてもよいのではなかろうか。

各種小テストの解答は受験終了後、すぐに確認できるように設定した。解説も全体フィードバック欄に事前に入力しておき、終了後にすぐ復習できるようにした。画像などを提出する課題も、先述の利用制限機能を応用して、提出後すぐに解答・解答例の PDF を閲覧できるように設定した⁹。自分の解答が合っているかどうかは、問題を解き終わってすぐのタイミングが一番気になっているだろうから、それに対してすぐにフィードバックできる体制を整えたのである。

Moodle は学生の実験状況をモニタリングすることが可能なので、受験時間などの総計から学生の負担を把握することができる。そこで、学生の平均的な課題完了時間が90分から120分間に収まるように心がけた。この分量に対してはアンケートでは「やや負担が大きい」と感じる学生が半数を超え、2割程度の学生が「非常に負担が大きい」と感じていた¹⁰。筆者は時折寄せられる学生からの負担軽減への要望に対し、適宜問題数の削減などを施したが、それ以上に気を遣ったのは、できる限り形式を定め、それを繰り返し替えることであった。学生の水準を高めるためには、様々なメニューを提示して、複雑な刺激を与えなかったのだが、学生は毎回課題にどれだけの時間がかかるのか推測しづらくなり、学習計画も立てづらくなる。今年度のオンライン化で大量の課題に悩まされている学生に必要以上の負荷を与えることは避けたかった。課題が締切までに終わるかどうかわからないという状況は、心理的な負担も大きいだろう。授業中も学生の実験状況をリアルタイムで観察しながら適宜問題にヒントを増やしたりして、負荷の調整を試みた。

Moodle については、筆者はこの1年間で様々な試行錯誤を繰り返してきた。書くべきことは山のようにあるのだが、紙幅にも限りがあり、上記のような概要の説明に留めたい。ご覧になって分かるように、筆者の作り上げた Moodle のコースは、課題量が多い。そして満点を取らなければ単位が認定されない。これだけの量のトレーニングを確実にこなせば、実力は否が応でも上がる。とはいえ、受講生がこの課題量を少なからず負担に感じていたのも事実である。スパルタ式の授業だけでは離脱者が続出する可能性も否定できない。このシステムが1年間何とか回ったのは、筆者の授業が単に無味乾燥な課題の繰り返しではなく、学生とのコミュニケーションがある程度成立したからだと考えている。以下に、そのコミュニケーションツールについて紹介をしたい。

第2章 学生との双方向性を確保する

第1節 LINE オープンチャットの活用

Moodle を核にできたことで、授業としての形を整えることができた。おそらく、これだけでも授業をオンライン化するという最低限の任務は果たすことができたであろう。しかしながら、双方向性をいかに確保するかは大きな課題であった。そもそも一部の大学では、学生が Moodle に自分で登録してもらう必要があった。登録の方法をどのように伝えるのか、登録に問題があった場合にどのように学生からの連絡を受け付けるのか、悩ましい問題が残る。もちろん各大学の指定した連絡方法に従うのが無難であるが、大学によってはメールによるリマインド機能がなく、学生からの書き込みがないか教員が定期的に巡回する必要がある、可及的速やかに対応できない恐れがあった。また、教員から学生への連絡についても、学生がメールを毎日確認してくれるのかどうか定かではなく、あるいは大学から届く膨大なメールの山に埋もれてしまう不安もあった。

そこで、思いついたのが LINE を利用することである¹¹。おそらく LINE を使っていない学生はいない。これを通じて連絡をすれば、通知に気付かないことはないだろう。学生にとっても普段から使い慣れているツールを使った方が、精神的な負担も減るのではないか。

また LINE は各大学の LMS が機能しなかった場合の保険でもあった。コミュニケーションツールを各大学が提供するシステムだけに限定すると、万が一、サーバなどに不具合が生じた場合に連絡を取り合う手段を失うことになる。安定したプラットフォームを外部にいくつか持っておくべきであると感じたのだ。

もちろん、まだ友人にもなっていない学生たちが LINE アカウントを知らせ合うことには抵抗があるであろうから、グループトークの方式はとらず、オープンチャット機能を利用することにした。これは LINE のアカウントさえあれば、Web の匿名掲示板のように、互いにアカウントを知らせなくとも、トークをしたり、情報を収集したりできるサービスであり、実際に地域の掲示板などで広く活用されている。この機能を使ってクラスの「掲示板」を作成して、学生に実名で登録してもらえば、学生同士でも交流できるようなプラットフォームができるのではないかと考えたのだ¹²。また、オープンチャットの「投票機能」を活用して「教科書は手許に届きましたか?」「Zoom で交流会があったら参加しますか?」といったアンケートを簡単に集めて、学生の状況や意向を速やかに確認することが可能であった。

このようにして作った LINE のオープンチャットはとりわけオンデマンドの授業において筆者と学生を結びつける重要なツールとして機能した。しかしながら、実際に運用を始めてから気付いたのは、LINE で積極的に質問をしてくれる学生は一部に限られ、思いのほか質問が少ないということであった。その一方でメールでの相談が五月雨式に来ることから、学生たちはまだ親しくなっていない同級生の目を気にして発言しないのではないかと推測した。授業中に挙手して質問するのが躊躇われるのと同様に、まだ打ち解けていないメンバーの中で発言す

るのはそれなりに勇気の要ることである。

そこで、質問の受付に関しては、次項で説明する Google フォームを中心とすることにし、LINE は筆者からの連絡や、学生からの質問を全体で共有するためのツールとして利用することにした。幸いに事務連絡が滞ることはなく、既読確認機能もあるので閲覧の有無も確認できた。各大学の Moodle 等の連絡手段に遅延が見られるときも、LINE を経由して迅速に伝達することが可能になった。

また、筆者のオンデマンド授業は、期限以内に課題を完了できればいつ受講してもよいことにしていたが、春学期は半数程度、秋学期は 4 分の 1 程度の学生が正規の授業時間に課題に取り組んでくれた。そこで、学生たちがリアルタイムで受験する様子を見て、良く見られる間違いなどについて LINE 上でコメントを加えたりした¹³。なお、LINE にはデスクトップアプリがあるので PC でも使うことができる。教材作成、授業録音などと同時進行で、いつでも LINE を通じた連絡ができるような体制を整えた¹⁴。

第 2 節 Google フォームによる匿名質問受付

先述のように、LINE やメール、あるいは Moodle のメッセージ機能を通じた質問は開講前から見られた。しかし、わざわざメールで送るのは躊躇われることもあるだろう。自分だけが理解していないのではないかという羞恥心から、再度の説明への要望もしにくいのではないか、あるいは教員の誤植や言い間違いも面と向かっては指摘しにくいだろう。より質問のハードルを低くするために利用を決めたのが Google フォームを使った質問受付窓口であった。これを匿名で質問できる「目安箱」として提示したのである。Google フォームはシンプルな記述式のフォームにしたが、投稿されたらすぐに通知メールが届くように設定し、速やかに LINE を通じて返答するシステムにした。

この方式は諸刃の剣であった。匿名での投稿は、質問の数を必然的に増やす。それに対応できるのか。あるいは、教員への批判なども投稿しやすくなるのも事実である。少々怖さもあった。しかしながら、学生がいま何を考えているかを少しでも理解することを優先することにした。コロナ禍という緊急事態を経て彼らの心には大きな変化が見られるかもしれない。あるいは、追い詰められている学生もいるかもしれない。彼らの声を少しでも聞いておく必要があるのではないかと考えたのである。

結論から言えば、この匿名の目安箱の設置は大正解であった。クラスによっては 1 日に 2 桁の投稿が来ることもあり、対応に追われることにもなった。愚痴や不満も投稿された。しかし、それに対して一つ一つ真摯に対応していくことで、学生とのコミュニケーションは間違いなく円滑化した。筆者の授業は目安箱なしには成立し得なかったと思っている。以下、いくつかの例を示してその効果を紹介したい。

学期当初の Google フォームには学生の戸惑いが率直に記されていた。例えば教科書購入を

巡って一部の学生は明らかに困惑していた。「教科書が手に入らない」「生協のサイトで売り切れのまま」「Amazon では高すぎる」「勉強道具一切を下宿に置いてきたまま実家に戻ってきた。辞書も参考書もない」といった声が各大学で相次いだ。大半の学生は教科書を問題なく購入できていたが、購入に手間取った学生は途方に暮れ、どうしたらよいか分からない様子であった。特に1年生は高校まで教科書は学校で配付されるものであって、自分で調達するものではなかったであろうから、戸惑いも大きかったであろう。生協や各書店のホームページのデザインが、慣れ親しんだ Amazon などとは大きく異なったことも一因だったかもしれない。いずれも販売サイトのリンクを LINE に載せたりして対応したが、教科書会社の配慮で教科書の一部を PDF で提供してもらうことができ、これを Moodle 上に一時的にアップロードすることで、正常に授業運営を続けることができた。各社の迅速な対応に感謝したい。

また、Moodle をはじめとするネットに関わる戸惑いも数多く見られた。「Moodle にログインしてもエラーが出る」「小テストが動かなくなった」という技術的な質問は数多く、これらは大学の情報関連の部局に回すべき問い合わせであろうが、同様の問い合わせが事務方に殺到していることは容易に想像できたので、全て自分で対応することにした。操作に関することはデスクトップ動画を撮影して YouTube に限定公開して見てもらったりもしたが、端末由来のエラーは再起動すればおおむね解決した。これらの回答もできる限り LINE で共有することで学生も対応を学び、この手の質問は次第に減っていった。

教員のミスをやかに指摘してくれることも目安箱の利点であった。もちろん各コンテンツをアップロードする段階で完璧を期すべきなのであるが、とりわけ春学期は仮眠だけで仕事をし続けるほか無かったので、必然的にケアレスミスは避けがたかった。解答をアップロードし忘れたり、別の課の解答を載せてしまったり、小テストのメット時間設定を間違えたり、小テストの解答が間違っていたり……と毎週どこかのクラスで細かいミスを繰り返し、そのたびに、Moodle を修正して LINE で全体にアナウンスした。こういったエラーを指摘してくれたのは、毎回率先して課題に取り組んでくれた学生たちであり、たび重なるエラーで困らせたことを申し訳なく思うとともに、それでも1年間通して率先して受講を続けてくれたことに感謝したい。

授業が軌道に乗り始めると内容面の質問が増えはじめた。「2声と3声の違いがわからない」「鳴を使った疑問文と反復疑問文は何か違いがあるのか」「教科書で干という単語が出てきたが、どういう文脈で使うのか」などなど、毎回のように様々な質問が飛びだしてきた。これらの質問に対して LINE で回答することで、質問していない学生も新たな視点を獲得することができた。「オープンチャットや目安箱があるので会ってなくても他の人が疑問に思っていることがわかり、自分も新たな発見につながった」とアンケートで述べてくれる学生もいた。

また、学生が忌憚なく意見を出してくれたので、授業運営を絶え間なく改善することができた。例えば、課題の分量については、学生はどうも90分以上課題に時間がかかると「多い」と感じる向きが多いようであった。対面であれば90分の授業の前後に予習復習で最低でも1～2

時間はかけてほしいので、正直なところ、もっと負荷をかけても良いのではないかとも思ったが、やはり心理的に圧迫感があると学習効率も落ちる。課題を作るときには、ポイントを絞るようにして重複を避け、学生が効率的に学習できるよういっそう心がけることにした。また、学生の通信環境を考慮して小テストの時間を伸ばしたり、フィードバックの時間をできる限り早めたり、例文を増やした補助教材を配布するなど学生の意見から生まれた改善は多い。

目安箱を導入したことによって、授業そのもののあり方が根本から変わることもあった。ある中級クラスの事例である。授業が始まって1ヶ月ほどしたところで、以下のような投稿が相次いだ。

「様態補語など習っていない分野や単語が多くテストが難しいです」

「比較の表現を一年生の時に習っていないので第3課の学習のみだと理解がおいついていません」

「実力を上げるためにテストを難しくしてくださっているのだとは思いますが、おそらく先生の思う私達の語彙力を始めとした様々な部分に乖離があると思います。特に復習テストの方で知らない単語や文法がしばしば出てきてとても大変です。正答率も必然的に下がってしまうため成績が低くついているのではないかと心配になっています。単語だけでも教科書に登場したもののみにして下さるとありがたいです。」

「今日「把」が入った文章が出てきましたが、把構文ってなんですか？」

そのクラスでは、中級の授業でありながら「gāoxìng de bùdéliǎo」のようなピンインを簡体字に直す問題の正答率が4割未満と想定外に低かったので不安を感じてはいたのだが、ほぼ満点を取得してくれる学生もおり、当初はそのような意欲ある学生たちの水準を高めることに夢中で、課題を平易にしようとは考えていなかった。しかし、「比較を習っていない」「様態補語を習っていない」とはどういうことか。筆者は受講生が1年生の時にどのような学習をしたのか全く確認せぬまま授業を進めていたことに気付いた。LINE や Google フォームで情報を集めたところ、その日のうちに次々と情報が寄せられ、1年次の授業では20課ある教科書のうち14課までしか終わっておらず、補足教材なども配付されていないことなど様々なことがわかった。要するに課題が出来ていた学生は、自分で参考書などを使って学習していたにすぎなかったのだ。大半の学生にとっては、1年次から真面目に学習していたにも関わらず、2年次からオンライン環境に放り込まれたあげく、手に負えないほど難しい問題に取り組みされ、わけもわからずに戸惑っていたというわけである。早速教科書会社に事情を説明して当該教科書を入手すると、14課までには把構文はおろか、補語すらひとつも出てこない。つまり de とはいえ「的」しか思い浮かばない状況であった。例文も中国語検定4級レベルの単語に限定していたのだが、これでは難しいと感じて当然である。初級中国語の文法事項で重要なことはおお

むね教科書の後半部分に集中しているから、このまま中級教材を学び続けても何も身につかないだろう。学生との連絡経路がなければ「1年生の時に不真面目であった学生が多い」と思い込んでいたかもしれない。

このクラスに関しては授業計画を根本から変更せざるを得なかった。1年の教科書の15課～20課を学習していないことを前提に解説音声を作り、スライドの例文も単語をさらに厳選した。そして、補語や比較などの講義と確認問題を作成して数週間掛けて学習しなおしてから、本来の授業内容に戻すことにしたのである。

幸いこの一連のやりとりは、学生との一定の信頼関係を築くことに寄与したようで、春学期のアンケートでは、柔軟に授業内容を変更したことに対する感謝の声が多数寄せられた。

筆者としては、Google フォームによる意見収集は、授業中に間接視野で行っている様々な観察の代用のようなものであった。もちろん、膨大な量の意見に対して向き合うのは容易なことではない。しかしながら、結果としてこの仕組みを取り入れたことで教員が学生の意見に声を傾けやすくなり、学生の不安・不満を大いに和らげ、授業へのモチベーションを最後まで保つことに繋がったのではないかと思っている。授業形態の如何を問わず、教員に気楽に声を掛けられるような雰囲気作りは、これからも続けていかねばならないだろう。

第3節 個別にフィードバックする

筆者の講義では、オンラインでは例年通りの筆記試験が困難であることを前提として、評価の軸を形成的評価に置いた。Zoom を利用できた場合は、後述するように学生と一対一で面談しながら口頭試験を実施したが、オンデマンドの場合には、朗読課題を実施して音声をMoodle 上に提出させた。Moodle の課題窓口には詳細なフィードバックを入力できるので、得点だけでなく採点の根拠を詳細に記して返却した。オンデマンド型の授業では、学生のアンケートを見る限りでは、この試みも非常に歓迎を受けた。

数百人の学生に対して迅速にフィードバックを行うため、課題文とそのピンインは雛形として準備して、フィードバック欄にコピーアンドペーストを行い、修正すべき点を太字で強調して示し、改善方法などを提示した。同じ間違いを繰り返す場合には、Moodle の音声録音機能を使って模範音声を吹き込んで示した。これは非常に手間がかかる作業であり、音読課題を出した週には、度重なる徹夜は避けられなかった。しかし、それでもこのフィードバック作業を続けたのは、2回、3回と続けていくにつれて確実に学生たちの発音が改善されていったからである。英語も含めて個別に発音のフィードバックを受けた経験が全くない学生も少なからずいたため、自分の発音がどうしてうまくいかないのか、その理由が初めて理解できた者も少なくなかったようである。また、発音が良かった学生、あるいは前回と比べて改善された学生には、称賛の声を惜しまないようにしたので、学生たちのモチベーションは確実に上がっていた

ようだ。このフィードバックを毎回楽しみにしていた学生も少なくなかったようである。その分、フィードバックが遅れた際には催促が来ることもあった。学生からの感想の中には「疎外感を感じずに済んだ」「モチベーションが上がった」という言葉も見られた。スクリーンの向こうに生身の人間を感じさせるようなフィードバックの重要性を深く感じた1年であった。

そしてこのような経験から改めて痛切に感じたのは、学生たちが求めているのは教員から個別に送られるメッセージなのではないかということであった。つまり、集団としての学生ではなく、顔と名前のある個人として扱って欲しいのではないか。このフィードバック作業で、そのような欲求がある程度満たされたことが、授業へのモチベーションにも繋がったのではないか、というのが筆者の持っているひとつの仮説である。

筆者は対面の語学授業で「ゴールデンウィークまでに受講生全員の顔と名前を覚える」ことを義務として課してきた。語学の授業は、学生を頻繁に指名するものだが、極力名簿に顔を落とさず、集中力が下がっていきそうな学生や、答えられそうな雰囲気や全身で醸し出している学生を臨機応変に指名したいものである。授業に関係の無い私語をしていたら、即座に「○○君、何話しているの?」と呼びかけるだけで、私語は格段に減る。やはり、語学の授業は、学生はしっかりと個体識別するほうが、教員としてもやりやすいし、学生のパフォーマンスも上がる。

このような姿勢は、オンラインでも貫いた。Zoomで顔を合わせる学生は勿論のこと、顔も知らない学生も課題への取り組み方や、実際に提出してくれる朗読音声など、様々な所に個性が滲み出ている。フィードバックも定型文に頼らず、相手の名前をできるだけ呼びながら課題点を指摘し、相手をイメージしながらどのように伝えるべきか思考することは、対面と同様、いや顔を合わせられない分、より一層頭を悩ませながら行った。もちろん、そのような気遣いなど余計なお世話と感じる学生もいるだろうが、この姿勢を貫くことで学生の負担が増えるわけではない。こういった筆者の態度に対して少なからぬ学生が意気に感じてくれたことは心から嬉しく思うとともに、今後の教育でも同様の努力を続けていく必要性を強く感じた。

第3章 学生と話す、学生同士が話す

筆者の今年度のオンライン授業の中核は前章までにおおむね説明した。最後に付け加えるのは、オンラインでどこまで学生を結びつけることができるのか、という試みである。筆者は中国語をはじめとする語学の必修授業は、学生同士の交流のプラットフォームとして機能していると考えている。LINEのオープンチャットで意見を共有するだけでも「自分だけではない」という孤立感からの解放は実現できたかもしれないが、学生同士が直接結びつくわけではない。実際に会えなくとも、せめてカメラ越しにでも言葉を交わすことはできないだろうか。コロナ禍で友人を作る機会を逸している学生をどうにかして結びつけられないか。特に1年生は、入

学式も懇親会もなくなり、サークル等への参加もままならず、同年代の友人と交流したい気持ちが強いことが予想されたので、最初の授業はかなりの時間を交流会に当てた。その際に使ったツールの一つが Remo (<https://remo.co/>) という WEB 会議ツールであった。このツールの特徴は「会場を自由に動き回り、メンバーに話しかけることができる」機能を有することであった。Zoom のブレイクアウトルームは教員がコントロールすることになるが、Remo は学生が自由に話し相手を選ぶことができる。試験的に利用してみたクラスでは大いに盛り上がった。ただ当時の難点は英語版しかないこと（現在は日本語版がリリースされた）、そして一部の学生に不具合が生じ、その原因が特定できないことであった。

結局、2020年度の段階で最も活用できたのは Zoom のブレイクアウトルームであった。これに教員が一工夫加えることによって、学生と学生のあいだの交流を促すことにしたのであった。例えば、交流会の席ではお決まりの「みんなの前で自己紹介」もしてはもらうが、最も長い時間を使ったのは、ワークシートなどを準備して質問ゲームなどを行いながら交流を促すことであった。いきなり、「さあみんな交流してください！」とか、「さあ自由に話してください！」と言っても、下手をすれば何をどう話してよいかわからず気まずい雰囲気が出ることもあるだろう。実際に筆者は初年次教育などでそのような失敗を繰り返してきた。このような場合には、例えば「誕生日の順で自己紹介してください」と指示を与えるだけで、相手の誕生日を確認するという会話が生まれるから、それだけで以降のコミュニケーションはスムーズになる。簡単な形式を準備してあげることが大事なのである。筆者は毎回の反省を糧にして、手札を増やしてきてはいたが、オンラインで実施する際にはどのような形式が良いか、いかなるテーマで交流してもらうのかは、毎回遅くまで知恵を絞った。

授業が本格化すると、筆者は Zoom のアカウントが付与された大学では積極的に利用し、相互交流を活発化させるべく、ペアワークとグループワーク、さらに教員と1対1で実施する口頭試験に重きを置いた。ペアワークについては発音練習時にブレイクアウトルームを作成して2人組、もしくは3人組になって教科書を読む練習をしてもらった。これについては、あえて各部屋を巡回することは避けた。学生同士でリラックスしながら練習してもらい、余った時間には息抜きに雑談でもしてもらいたいと思ったからだ。

グループワークは口頭試験と対になるものであった。毎月1回程度、朗読等の口頭試験を課したのだが、試験そのものは1対1で行う。その際に、該当者以外は4～5人程度のブレイクアウトルームに分けて、適宜グループワークを実施してもらう。一例を挙げると、1年生の場合は世界の地名を簡体字で書いたシートを配付し、それをグループで協力して埋めてもらった。作業自体は簡単で、要領良く作業すれば10分程度で終わってもおかしくない分量だが、学生同士の交流を促進することを主眼にしていたので、残りの時間は自由に使ってもらった。そのほか、中国語の料理のメニューを配って、注文するなら何が良いか選ばせる、という課題

や、春節に関わるキーワードをいくつか提示して、それを使って簡単な作文を作ってもらった課題を出したりもした。このような教室での活動は中学や高校の英語教育の現場に蓄積があるので、適宜参照しつつ、大学生向けにアレンジを加えて実施した。このような共同作業があったほうが、お互い言葉を交わすきっかけにもなるのではないかと思ったのである。

学期末には30~60の例文を暗記させて、そのうちのいくつかを答えさせる、という口頭試験を実施した(図2参照)。参照できないように目を閉じて解答してもらうので、学生にとってはかなり緊張するようだが、このような適度な緊張感を与える「イベント」の存在は、単調になりがちな在宅での学習に少しでもメリハリを与えることができたのではないか。そして、学生の学力を高めることはもちろんのこと、学生の間で勉強についての会話を増やすことも狙いの一つであった。実際に学生同士で勉強して試験に臨んだ者もいたようで、中には「家族に協力してもらいました!」という学生までいた。もしこれを切っ掛けに家庭内で大学の勉強に関する会話に花が咲いたのであれば、それは思いもよらぬ波及効果である。

1	A	B	C	D	H
1		日本語	中国語	ピンイン	
2	1	私たちちょっと休みましょう。	咱们休息休息吧。	Zánmen xiūxi xiūxi ba.	重ね型
3	2	教室で飲み物を飲んでも良いですか?	教室里可以喝饮料吗?	Jiàoshì lǐ kěyǐ hē yǐnliào ma?	助動詞「可以」
4	3	私たち食堂に行ってご飯を食べましょう。	我们去食堂吃饭吧。	Wǒmen qù shítáng chīfàn ba.	運動文
5	4	この字はどう読みますか?	这个字怎么念?	Zhège zì zěnmē niàn ?	疑問詞「怎么」
6	5	どうしたの?	你怎么了?	Nǐ zěnmē le ?	疑問詞「怎么」
7	6	彼はどうして来ないのですか。	他为什么不来。	Tā wèishénme bù lái.	疑問詞「为什么」
8	7	あなたたちはどこから出発しますか?	你们从哪儿出发?	Nǐmen cóng nǎr chūfā ?	前置詞「从」
9	8	あなたたちの学校は駅から遠いですか?	你们学校离车站远吗?	Nǐmen xuéxiào lí chēzhàn yuǎn ma ?	前置詞「离」
10	9	授業が終わったら映画を見に行きましょう。	下了课去看电影吧。	Xià le kè qù kàn diànyǐng ba.	アスペクト「完了」
11	10	私は牛乳を二杯飲みました。	我喝了兩杯牛奶。	Wǒ hē le liǎng bēi niúǎi.	アスペクト「完了」
12	11	まもなく二十歳です。	快二十岁了。	Kuài èr shí suì le.	快~了
13	12	私は行くのをやめた。	我不去了。	Wǒ bù qù le.	語氣助詞「了」
14	13	私は友達と一緒にいきます。	我跟我朋友一起去。	Wǒ gēn wǒ péngyou yìqǐ qù.	前置詞「跟」
15	14	怒らないでよ!	别生气了!	Bié shēngqǐ le.	禁止
16	15	焦らないで	别着急。	Bié zhāojí.	禁止
17	16	あなたは毎日何時寝ますか?	你每天睡几个小时?	Nǐ měitiān shuì jǐ gè xiǎoshí ?	時間量
18	17	彼はなかなか真面目です。	他挺认真的。	Tā tǐng zhēnzhèng de.	副詞「挺」
19	18	彼はもう仕事を見つけました。	他已经找到工作了。	Tā yǐjīng zhǎodào gōngzuò le.	結果補語
20	19	新出単語は全部覚えましたが。	生词都记住了没有?	Shēngcí dōu jìzhù le méiyǒu ?	結果補語
21	20	言い間違えました。	我说错了。	Wǒ shuōcuò le.	結果補語
22	21	彼はきっと来ますよ。	他一定会来的。	Tā yīdìng huì lái de.	助動詞「会」
23	22	彼は中国語が話せます。	他会说汉语。	Tā huì shuō Hànyǔ.	助動詞「会」
24	23	喫茶店は地下鉄駅の右側にあります。	咖啡馆儿在地铁站右边儿。	Kāfēiguǎnr zài dìtiězhàn yòubiānr.	方位詞
25	24	わたしの家は東京の西にあります。	我家在东京的西边儿。	Wǒ jiā zài Dōngjīng de xībiānr.	方位詞
26	25	お酒を飲んだら運転できません。	喝了酒不能开车。	Hē le jiǔ bùnéng kāichē.	助動詞「能」
27	26	もっと安くしてもらえますか。	能不能再便宜一点儿?	Néng bù néng zài piányi yidiǎnr ?	助動詞「能」
28	27	私は図書館で資料を調べます。	我在图书馆查资料。	Wǒ zài túshūguǎn chá zīliào.	前置詞「在」
29	28	料理が多すぎて、食べきれません。	菜太多了，我吃不下了。	Cài tài duō le, wǒ chībùliǎo.	可能補語
30	29	もう10時になりましたがまだ間に合いますか?	已经十点了，还来得及吗?	Yǐjīng shí diǎn le, hái láijíde ma?	可能補語
31	30	とても高くて買えません。	太贵了，买不起。	Tài guì le, mǎibùqǐ.	可能補語
32	31	もう一度言ってください。	请您再说一遍。	Qǐng nǐ zài shuō yí biàn.	副詞「再」
33	32	すみません、あと10分待ってください。	不好意思，再等十分钟。	Bù hǎoyìsi, zài děng shí fēnzhōng.	副詞「再」
34	33	もう飲めません。	我不能再喝了。	Wǒ bù néng zài hē le.	副詞「再」
35	34	私は嬉しくなってたまらない。	我高兴得不得了。	Wǒ gāoxìng de bùdélǎo.	程度補語
36	35	私は頭がひどく痛い。	我头疼得厉害。	Wǒ tóu téng de lìhài.	程度補語
37	36	あなたは中国語を話すのが本当に流暢です。	你汉语说得真流利。	Nǐ Hànyǔ shuō de zhēn liúlì.	程度補語
38	37	彼は料理をするのが上手い。	他做菜做得非常好。	Tā zuò cài zuò de fēicháng hǎo.	程度補語
39	38	昨夜はよく眠れましたか?	昨天晚上睡得怎么样?	Zuótiān wǎnshàng shuìde zěnmeyàng?	程度補語

図2 秋学期期末試験に用いた例文集 (google スプレッドシートで作成)

これらの試みは概ね学生から好評を得た。期末の匿名アンケートで「友達ができた」「この授業をきっかけに色々な人と話せた」と喜びの声を寄せてくれる学生が多く、試みが無駄でなかったことに安堵した。この貴重な縁をこれからの対面での活動でも積極的に活かしてもらいたいものである¹⁵。

終わりに

以上、筆者の2020年度のオンライン授業の概要を示してきた。総括すれば、筆者の授業は Moodle を用いた厳しい学習管理を実施しながら、LINE や Google フォームなどのツールを使って双方向性を保ったことにより、当初想定していた以上の効果を上げることができたと自負している。さらに Zoom で学生の交流を促すことができたクラスは総じて満足度が高かった。良い授業をすれば質問が増え、それに回答することによって、学生の知がさらに起動することは対面授業でも経験してきたが、それが制限の多かったオンラインでもある程度実現できたことは望外の喜びである。成果が Moodle によって数値化されるので、努力すれば確実に授業が良くなってゆくという実感が得られたことも筆者のモチベーションを高めるのに貢献した。

しかしながら、筆者の「成功」は必ずしも以上のシステムが優れていたからだと単純に結論づけることはできない。第一に、コロナ禍という特殊な状況が与えた緊張感が、筆者の授業では良い方向に作用したのではないかと思うのだ。先の見えない状況で、学生たちはおおむね教員の指示をよく聞き、課題にも真剣に取り組んだ。1回あたり予習復習合わせて3～4時間かけて学習してくれた学生も少なくなかった。2年生以上で、1年次に要領よく単位を取得した学生も、今年はそのノウハウを使うことができないので、まずは真剣に向き合わざるを得なかったに違いない。今年度の授業は、学生の例年にない努力に支えられていた。その結果として、学力の向上が多くの教員によって感じ取られたのである。2021年度以降に同じことをしたからといって、同等の効果が得られるとは限らないだろう。

また、このシステムは教員が生活の全てを教育に振り向ける覚悟がないと回らない可能性があるのも事実である。Google フォームに投稿される様々な意見に LINE で返答を続け、手書きの課題にも、メモ書きのように「これで合っていますか？ 自信が無いです」「こういう別解もありですか？」といった書き込みが見られたので、これにも丁寧にコメントを返した。さらに朗読課題に対しては先述のような丁寧なフィードバックを繰り返すことによって、いつのまにかメールや Moodle のメッセージと言った、匿名化されない個人個人とのやりとりも増えていった。このように確実にフィードバックがあるということは、学生との信頼関係を深め、新たなコミュニケーションがそこに生まれ、好循環を生み出すが、教員の側に学生とのコミュニケーションを優先する意識、あるいは楽しむ姿勢がないと、1年間続けることは難しいだろう。筆者が行った授業実践は多分に属人的なものであり、万人に薦められるものではないのか

もしれない。

また、筆者の授業から零れ落ちてしまった学生もいたことも事実である。脱落しそうな学生にはメールを送り、成績提出期限まで連絡を待ったが、最終的に全履修生の3%程度の学生は単位が取得できなかった。当該学生にはもう少し違った声かけをするだけで結果が異なったのではないかという思いが強い。ただ、完璧な授業運営など存在しないのであるから、今回の問題点や、学生たちからもらった貴重な意見の数々を、来年度以降の筆者の教育に活かしていくことにしたい。

今年のオンライン授業に対する学生からの反応を見て強く感じたのは、たとえオンラインであっても教員の熱意は伝わる、ということであった。例えば、春学期、体力的に続かなくなった時期に、フィードバックが大幅に遅れていることを率直に詫びたところ、複数の学生から目安箱に励ましの言葉をもらってしまった。授業終了後の任意の匿名アンケートでは「解答する側が大変な量の課題を一から作り、その上、リアルタイムでサポートしてくださるのは本当に大変だと思います。」「時には厳しく上達した時にはたくさん褒めてくださる先生のコメントがいつも励みになっていました。先生から直接コメントをいただけるというのが、一番嬉しかったです」「先生が時間をかけて準備してくださっているのが伝わってきて、私も本気で頑張らねば！と中国語は特に重きをおいて勉強しました！」といったコメントを最後にもらえたことは教員冥利に尽きた。

筆者としては、このコロナ禍によって学生を学習の機会や大学キャンパスでの貴重な経験を奪われた「谷間の世代」とするのではなく、変わりゆく大学に最初に適応を始めた「黄金世代」として世に送り出したいと思っている。各大学で何人かの学生から、来年度は必修ではないが継続履修したいとの相談や、独学で勉強を続けたいので良い方法を教えて欲しいという相談を受けた。学び続ける意欲ある学生が存在することは、大変に心強く感じる。筆者の悪戦苦闘は一つのモデルケースとして提示することは出来ないが、最低限のリソースで、「学びを止めない」ことには一定の成果を上げたものと自負している。これから学生たちが、より深い学びを続けていき、変わりゆく世の中を支えてゆく人材として遅く成長してゆくことを願ってやまない。

【謝辞】

2020年度の授業に当たって必要な教材を提供していただき、音声等の教材利用を認めてくださった白帝社および朝日出版社、過去問の利用を許諾していただいた中国語検定協会、あるいは教材で例文を拝借したNHKのゴガクルなど、どの機関も Moodle での利用を速やかに許諾してくださったことに改めて感謝申し上げます。また、各大学の専任教員の方々は様々な心遣いをしていただき、共通教材の作成などをしてくださる大学まであったことは、筆者が独自のコンテンツを制作する時間を確保する助けとなりました。ひとつの授業が多くの方の助力の上に成り立っていることを痛感する一年でした。皆様どうもありがとうございました。

主要参考文献

- 青木将幸『リラックスと集中を一瞬でつくる アイスブレイク ベスト50』ほんの森出版、2013年
- エリザベス・F・パークレイ、クレア・ハウエル・メジャー『学習評価ハンドブック：アクティブラーニングを促す50の技法』東京大学出版会、2020年
- 大澤真也，中西大輔編『eラーニングは教育を変えるか—Moodleを中心としたLMSの導入から評価まで』海文堂出版、2015年
- 西林慶武，高椋勇一『授業が変わる！最強の英語ペアワーク&グループワーク25』明治図書出版、2010年
- 日本リメディアル教育学会，大学eラーニング協議会監修『大学におけるeラーニング活用実践集：大学における学習支援への挑戦2』ナカニシヤ出版、2016年
- 宮添輝美『Moodle 活用法—語学の授業に生かす』海文堂出版、2011年
- Susan Smith Nash, *Moodle Course Design Best Practices: Design and develop outstanding Moodle learning experiences*, 2nd Edition, Packt Publishing, 2018

注

- ¹ なお、2020年度前期に行った慶應義塾大学法学部での授業実践の概要については、大嶋えり子・小泉 勇人・茂木謙之介編著『遠隔でつくる人文社会学知—2020年度前期の授業実践報告—』（雷音学術出版社、2020年）に寄稿した。
- ² 本稿では Moodle の設定方法なども詳細に紹介する予定であったが紙幅にも限りがあるので、いくつかのサイトを紹介するに留めたい。熊本大学教授システム学研究センターでは各種マニュアルを閲覧することができる（https://www.ield.kumamoto-u.ac.jp/?page_id=77）。富山大学も有益な情報を多数公開している（<https://www.itc.u-toyama.ac.jp/moodle3/guide/index.html>）。今年から Moodle を導入した早稲田大学もマニュアルが充実している（<https://www.wnpspt.waseda.jp/teacher/wsdmoodle/>）。ただ、Moodle は頻繁に更新されていくので、最新バージョンを反映することは難しい。英語の情報にはなるが、<https://moodle.org/>に掲載される情報やフォーラム上の議論を参照することもお勧めしたい。
- ³ 声調付きのピンイン入力は難しいので、han4yu3 のようにピンインの後ろに声調を半角数字で書かせるようにした。ü は v で代用した。
- ⁴ 単語テストの作成の仕方は比較的シンプルにして自分の負担を軽減するようにした。教科書の新出単語を入力していき、それをシャッフルする設定にするだけで、一定の難易度は確保される。また、2回目以降の受験の際にも再度シャッフルされるので、単純に出題順に解答を覚えて解き直すことはできなくなる。
- ⁵ 「いらすとや」（<https://www.irasutoya.com/>）は、みふねたかし氏が運営する無料イラストを提供するウェブサイトで、豊富なコンテンツから自分のイメージに合うイラストを検索することが可能である。
- ⁶ なおこの並び替えテストの作り方は、かねてより Moodle の使い方について貴重なご助言をいただいていた熊本大学教授システム学研究センター特定事業研究員の市村由起先生のご教示による。記して感謝したい。
- ⁷ 学生が自分で学習管理をすることを前提にすれば、Quizlet や Anki などを選択肢として成り立つが、Moodle に組み込んだ方が教員が課題実施状況を一元的に管理できる。
- ⁸ ただし、Moodle の並び替え問題は、同じ単語が繰り返し出てくるような文章には適していない。たとえば動詞＋目的語のあとに様態補語が来る場合、動詞を繰り返すことになる。例えば、「他说汉语说得很流利」を一文字ずつ並び替え問題にすると、最初の「说」と2回目の「说」が選択肢2の「说」と選択肢4の「说」という別のデータとして Moodle に認識される。しかし、我々の目にはどちらの「说」が2番目の選択肢であるかはわからなくなる。それゆえ、このような問題は避けるか、「说得」や「说汉语」といったフレーズを選択肢にするなどして工夫する必要がある。筆者はそのことに気付かずに出題して、あとで全員に加点する作業を行う必要が生じた。
- ⁹ ある課題を提出したら活動完了になるように設定しておき、その後に PDF ファイルにアクセスできるように設定しておくのである。課題の再提出を不可に設定すると、不正を予防できるが、筆者の授業ではそのような設定をせずともほぼ全員が不正をすることなく最後まで受講してくれた。
- ¹⁰ アンケートは、春学期と秋学期の終わりに Google フォームを用いて匿名で意見を集めた。
- ¹¹ ビジネスの現場で採用されている Slack の活用も前向きに考えたが、新しいツールを増やすと IT が苦手な学生には負担が大きくなるのではないかと考えて今回は見合わせた。

- ¹² 唯一の懸念は大学外のサービスを使っていることによるセキュリティの問題であった。「オープンチャット」ではあるが、外部にオープンにすることは避け、外部から検索はできないよう設定した。当初は登録にパスワード（参加コード）を必須にしたが、この方式では LINE で年齢認証が行われていないアカウントが弾かれてしまうことがわかった。所謂「格安スマホ」は認証機能が提供されていないのである。それゆえ制限は解除して「全体公開」タイプに変更し、全員が登録を終えた段階で「参加コードの入力」に戻すことにした。）
- ¹³ もちろん解答は伝えられないので、教科書の～を参照、第○課でやったあの項目を応用する、などのヒントを与えた。
- ¹⁴ Moodle のフォーラム機能でも同様のコミュニケーションが実現でき、一元化するという意味ではその方が適切であったかも知れないが、負荷を分散することが求められていた今年度の状況においては、やはり LINE が最適解ではなかったかと思っている。
- ¹⁵ 一部の中級のクラスでは1年の時にあまり互いに交流がなかったのか、交流に消極的なクラスもあった。そこではグループワークは避け、一人一部屋のブレイクアウトルームを作った上で待機してもらい、希望者は自由に部屋を移動できる設定にした。その上で、教員は各部屋を回って1対1の暗唱試験を実施した。この方式でも、何人かの学生は友人と会話を楽しんだようである。